

# 森林の価値評価について

信 大 農 菅 原 聰

森林は人間による文化的所産であり、単なる自然ではなくて、人間との直接的関係のなかで成立してきたものである。しかるに、近代林業は、必要とされるべき林種を最大の量と質とで保続的に供給していくことを課題とし、森林の価値を評価するにあたって、そのような視点でなされてきた。ところが、近年になって、人間ならびに環境にとっての森林の重要性に対しての認識がとみに高まり、森林の社会的機能（die Sozialfunktionen des Waldes）に対する国民の期待もますます増大してきている。そのようななかで、森林の価値を評価する方法として、既存の価値理論を準用して、評価されるべき森林の社会的機能を個別的にとり出し、それらをできるだけ貨幣的評価していくという方法がとられてきた。与えられた課題“森林の多面的機能の評価と管理のあり方について”は、そのような流れのなかで考えられたものなのである。

近代科学は自然の客観的認識から始まり、そして、価値としての“自然”のイメージをつくり出し多岐にわたる科学諸分野のみならず、科学に影響される限りでの近代社会の思想や文化にまで、ある秩序と内的統一性とを与えてきた。今世紀の科学の支配的なパラダイムはニュートン力学によって与えられたものであり、一切の官能的美を失なった無機的な秩序の支配する世界であった。<sup>注</sup>

最近になって、近代科学の支配的なパラダイムが急速に信用を失なってきたのは、“無限に開かれた宇宙”のイメージが、地球の有限性に直面した人間社会のあり方に矛盾するようになったからであり、均質的な無限の宇宙観”が否定されて、“多様性に満ちた有限の宇宙観”が肯定されるようになってきたからである。すなわち、多様性を本質とする生物世界に基づくパラダイムが新たに形成されようとしているのである。

このように科学的パラダイムの転換が進んできているなかで、森林の価値に対しての人びとの対応も大きく変換してきているようであり、従来の考え方でもってでは、それに対応していけないように思えるのである。そこで、最近、長野県下において認められた事例をあげていくことによって、人びとと森林との現代的な関わり方、新しい価値の認め方などを示しておくことにしよう。

最初の例として、小海町“ふるさとの森”事業をあげてみよう。国鉄小海駅沿いのシラカンバとカラマツの小海町において、山林経営資金に不足を来したので、“特定分収契約”によって、20～25年生のカラマツ林0.5haを1口として、60万円を負担してもらい、30年後には収益を50%ずつで分収するという条件で、費用負担者を募集したところ、100口の募集に対して766件の申し込みがあり、最終的には408口の費用負担者が確定した。この場合、費用負担者が見出だそうとした森林の価値というものを、アンケート調査などの結果からみると、“自然に対する愛着的価値”、“夢とロマン的価値”であることが実に多いのに驚くのである。もちろん、“資産形成的価値”を認めている

---

注) 詳しいことは、竹内 啓：価値としての「自然」—経済学批判の一つの難点—(中岡哲郎編：自然と人間のための経済学 朝日選書 100 朝日新聞社 1977)を参照されたい。

人も居るが、それ以上に、非貨幣的な効用を自らが森林を所有し、または所有する感覚で享受し受る点に、森林の価値が見出されていることが知られるのである。

次に北相木村の御座山の例をみていこう。御座山は佐久地方で残されているトウヒ、シラベ、コメツガなどから成る天然生林のひとつである。この御座山に対して国有林の伐採計画がたてられ、昭和57年度から伐採されることになったが、これに対して村民が大反対している。その理由として村民があげていることは、“御座山が村の顔であり、村民にとっても自己そのものである”ということである。確かに、村民は朝な夕なに御座山を仰ぎ、御座山の幸にあずかりながら生き、御座山にみとられて死んでいくのであって、まさに“ふるさと”そのものなのである。それは村外に流出していった村民にとっても同じことであり、“ふるさと”として想起するのは、御座山以外の何ものでもないのである。このように北相木村の御座山の森林においては、“ふるさと”を表わしているという点に、森林の価値が見出されていることに気づくのである。

これらのほかに、菅平高原では森林の景観撫育的効用が高く評価されているし、飯田市の松川入では、花崗岩を基岩とする地域であるだけに、土砂流出を押さえるという意味での環境保全的効用が森林に対して強く求められている。

森林が人間によって作り出された文化的所産であるだけに、このように、具体的な場所で、それぞれの条件に対応して、それぞれ森林の価値を評価せざるを得なくなってきたおり、それだけに、従来の“森林像”のままに森林の価値を考えていくことに疑問を感じざるを得なくなってきた。

現在行われているように、森林の価値を機能の面からとらえて価値評価していく方法は、それなりに評価し得るであろう。しかし、森林の価値は単に“もの”的価値だけではなく、“もの以外”の価値もあり、非貨幣的な価値もあり、むしろそれらの価値をこそ評価しなくてはならなくなってきただけに、森林の価値を評価していくには機能の面からの評価だけでは充分でないのである。森林に対する国民の期待が今ほどに高かった時代は今までにはなかったし、また、その期待の多様な点においても、現代はまったく特殊な状況下にあると考えられる。このように森林の価値の評価を多様化せざるを得ないなかで、“森林の価値をどのようにして把握していくか”についての問いかけをする重要性は明白であろう。

ここで、森林の価値評価を考えていくにあたって“森林はそれ自体としては絶対的な価値をもっているのではなく、森林の価値とは森林に関わり合う人間にとっての森林のもつ価値である”という考えを前提として提示しておこう。ところで、人間が森林に対して設定し、実現していく価値は、基本的には人間個々人の必要と関心によっているのであり、それだからこそ、森林の価値を考えていくには、文明そのものを考慮していかざるを得ないのである。そのようなことから、森林の価値を評価していくには、まさに非貨幣的なものをもふくめて、文明的視点から行なっていく必要性のあることを提案していくとともに、また、そのような視点から森林の価値を評価していく手がかりとして、次のような考え方ができることも示しておこう。

## 1 文明に対する反省としての価値

### (1) 稀少価値

わずかに残存している“かけがえのない”森林は稀少価値をもっているが、生物学的に考えるならば、“遺伝子の保存”という重要な意味をもっている。

## (2) 学術的価値

原生林などは、人間の文明の生態学的秩序について多くのことを教えてくれる。

稀少価値や学術的価値をもつ原生林などは、現代の文明に対して、われわれが反省していくときに優れた価値をもっており、文明の将来を模索する場合に有効な手がかりを与えてくれる。

## 2 文化的素材としての価値

### (1) 宗教的価値

わが国での宗教意識の根底には山や森などを神格化するシャーマニズムが潜んでいる。

### (2) 審美的価値

森林はわれわれに美的感動を与えてくれるし、また、われわれの心に安らぎや郷愁などの感情を呼びおこしてくれる。御座山の森林はまさにこのような価値を持っている。

### (3) 教育的価値

森林と芸術・人間形成との間には、非常に多くの関係があり、詩人・作家・画家・音楽家などの森林との出逢いについては、今さら述べるまでもないであろう。また、それ以上に、生活共同体としての森林は、非常に多くのことをわれわれに教えてくれるのである。

## 3 文明に対する相補的機能としての価値

これは現代の文明社会を下から支え、背後から包んでくれるような価値である。

### (1) 環境保全的価値

景観を維持し、洪水を調節し、水資源を涵養し、あるいは土砂流出や土砂崩壊を防ぐなどして、われわれの文明社会の環境を森林は保全している。菅平高原や松川入ではこの価値が高く評価されている。

### (2) 休養的価値

森林は現代文明のなかで緊張を強いられているわれわれに対して、心身の休養に役立っている。森林での休養を求める理由としては、“静けさと清浄で新鮮な大気に対する願望”や“自然観察の可能性”などがあげられており、小海町の“ふるさとの森”では、この休養的価値が高く評価されたと考えてよいであろう。

### (3) 保健的価値

現代においては、森林に接することによって“自然体験”・“自由な行動”などが可能となり、心身ともに健康な状況になり得るであろう。また、生物気象的效果によって健康的な生活環境を造成し得るであろう。

## 4 文明の物質的基盤としての価値

### (1) 財生産的価値

木材は環境になじみやすく、加工しやすい材料であるだけに、今後もなお利用されていくであろう。それだけに森林にとっては木材生産は相変わらず重要な課題であろう。